視点

睡眠リズムを整えるために

國學院大學人間開発学部教授　鈴　木　み　ゆ　き

コロナ禍の中、子ども達も幼稚園等も我慢の日々を強いられています。「思い切り声を出して歌いたい」「キャーキャー声をあげながら外で鬼ごっこしたい」「友達と楽しくおしゃべりをしながらお弁当を食べたい」・・・コロナウイルスという言葉は知っていても、大人の指示に従って生活をせざるを得ない子ども達にとって、何と窮屈で理不尽な日々でしょう。家庭の中で許される範囲での楽しみとして、ネットやゲームに向かうのは当然のことと言えます。保護者も慣れないリモートワークの中で、静かにしていてほしいからと、子どもの遊び相手をスマホやタブレットに託すのも頷けます。内閣府の「青少年のインターネット利用環境実態調査（令和２年度)」によれば、ここ数年、特にコロナ以降、低年齢児のインターネット利用時間は増えており、利用内容の内訳では「動画視聴」と「ゲーム」が上位にきています。

そもそも私達ヒトは、地球という約 24 時間で自転する星の上で生きている昼行性の動物です。朝の光とともに目覚め、日中よく動き（遊び)、夜の闇と共に眠ります。睡眠は脳と身体の整備工場で、脳と身体の疲れをとって各部位の働きを確認したり、記憶等情報を整理したり、翌日の生活に支障をきたさないよう脳の働きを支えていきます。一方で脳は休みつつも、骨や筋肉を伸ばすホルモンや、怪我を修復し新陳代謝を促すホルモン、免疫力を高めるホルモン等を睡眠中に分泌し、成長を促し健康を保持増進しているのです。ぐっすり眠った後の目覚めは気持ちよく、空腹を感じ、朝ごはんを楽しめます。子どもの主体性を尊重した園での活動（遊び）は多くの人・もの・コトや子ども同士のかかわりを生み、脳と身体への良好な刺激となって心地よい疲労をもたらします。入園後の保護者へのアンケートを見ると、入園前と比べ、明らかに寝つきが良くなったという回答が多く、子ども達の日常に園生活がいかに重要な役割を果たしているかがわかります。

では With コロナの時代、園の中で子ども達の睡眠リズムを整えるにはどうしたらいいでしょうか。１つは安全・安心かつウイルス予防対策に気を配りつつ、なるべく子ども達が主体的に動き出せる環境を作っていくことだと思います。園庭での遊びを大切にすることはもちろん、室内でも、這う、くぐる、またぐ、よける等新たな仕掛けを作るなど、子どもがやりたくてたまらない！と思うような体験をすることが、脳を動かし、身体を疲れさせて夜の寝つきにつながります。園での活動で何かに気づき、工夫し、試行錯誤し、取り組むことが、脳を動かし心身の満足感につながります。日常生活の中に園があることは、子ども達の健やかな成長に欠かせない要素なのです。

家庭に対しては、我が家ルールとして、動画視聴やゲームに費やす時間を決め、寝る１時間前にはスイッチを切るなどの情報提供が必要です。スマホやタブレットに入っているブルーライトは刺激が強く、入眠を促すメラトニンというホルモンの分泌を妨げることがわかっています。さらに怖いアプリ等で脅して寝かせることは、寝入りばなの深い睡眠（大脳皮質を休ませる重要な時間）を減らすこともわかっています。

子ども達の脳と身体を守り、日中脳が覚醒しているためにも、朝はスッキリ目覚め、食事をきちんと摂り、日中よく遊び、夜はぐっすり眠る生活を作っていきたいですね。

●～全日私幼連からの報告～

良質な幼児教育とは（2）

全日本私立幼稚園連合会
会長　田中　雅道

1980 年代スウェーデンは、女性の社会進出を支援する目的で幼稚園・保育所の一本化とそれを担う行政を、労働部門を担当する省に一元化しました。世界で一番早く幼保の問題に着目した政策だったと思います。その後およそ 10 年で幼保を担当する省は教育省に移管されています。

20 世紀の終わり頃、ヨーロッパ諸国では大学を出た人の失業問題が大きな社会問題となりました。もともと階級を重視する社会でしたから、大学を卒業する人数は人口比でかなり少なく設定されており、社会を動かす人材の育成が大学の大きな使命でした。ですから、大学卒業生の失業など起こりえないと考えていたのですが、社会に適応できない大学卒業生が現実問題として発生してしまったのです。

OECD（経済開発協力機構）は、この問題の根幹が教育内容に起因していると考え、幼児期からのすべての段階の教育の見直しを始めました。それまでヨーロッパ諸国では幼児期の教育環境には大きな関心は払われていなかったと思います。幼稚園教育は実施されていたのですが、日本でいう“幼稚園教育要領”に相当するものもあるにはありましたが、その内容は、簡単なものが作成されているだけで教育の中心は義務教育以降に集中していました。

いわゆる“認知能力”と言われる、先生から社会人として必要とされる能力を、基礎から順序だてて教えを受け、正しく理解し、獲得した能力を生かして社会に貢献するという構造で教育が行われていました。20 世紀、優秀な人材とは、学校教育でいい成績を収めることが必要だったのです。

アメリカでは、ペリーの縦断研究が注目されるようになりました。公立幼稚園の年長児のクラス人数をある幼稚園では 1 クラス 26 名で保育し、別の幼稚園では 17 名で保育するという 2 種類に分け、できるだけ同等の能力を持った先生が担任し卒園後の状況を追跡したのです。その後、小学生、中学生時代の学力で、少人数で 5 歳児の教育を受けた子どもの成績が上位となり、社会人となってからも、年間所得、離婚率、犯罪率などすべての指標で、少人数で 5 歳児の教育を受けた群が優位となりました。

ハーバード大学のベン・マーデル教授は、5 歳児のごっこ遊び“神様ごっこ”の子どもたちの発言内容、相手の意見を取り入れた時の遊びの状況変化を詳しく分析し、社会人として必要な“周囲の人と協調しながら自分の意見を同調させる能力”“同じ課題を様々な角度から検討し、継続して行う能力”といった、いわゆる“非認知能力”は、5 歳児の良質な環境の基の教育で培われることを主張しています。

このような流れを受け世界では、すべての子どもに良質な幼児教育を提供することが国家としての重要課題と認識され“幼児教育の無償化”が実現していったのです。

幼稚園ナビ 好評稼働中です！！

- ご利用には幼稚園ナビ導入セット(右図)が必要ですのでお手元にない設置者様は、下記お問い合わせまでご連絡ください。
- 教職員の方は登録を行うと、免許期限管理・各種研修の申込や研修履歴管理など業務に役立つ機能をご利用いただけます。

幼稚園ナビとは？

幼稚園ナビは、全日本私立幼稚園連合会が 2017 年 11 月から運用中の教員免許取得者の人材確保を目的とした幼稚園に関する求人・イベント情報・お役立ち情報を掲載した幼稚園に特化した全国版総合情報ナビサイトです。

幼稚園ナビの特徴

全ての機能を無料で利用できます！

— 教職員向け機能 —

免許期限管理 1	研修申し込み 2	研修履歴管理 3
イベント・求人情報を無料掲載！ 4	求人情報の簡単登録機能！ 5	職員の研修・免許管理機能搭載！ 6
求人票PDFの自動作成機能 7	ハローワーク求人と自動連携！ 8	自園の魅力を学生に発信！ 9

詳しくはWebサイトをご覧ください

https://navi.youchien.com/

お問い合わせ
幼稚園ナビ サポート事務局
担当：岩崎
093-647-7330
support@navi.youchien.com

●２・４団体長会・理事会合同会議

令和４年度幼稚園関係予算案等を報告

令和４年２月４日､オンライン形式にて団体長会･理事会合同会議が開催され、60 人が出席しました。

はじめに、尾上正史副会長から開会のことばがあり、引き続き田中雅道会長からあいさつがありました（注 1)。会長あいさつでは、今後の本連合会の在り方について、各地域に対し、きめ細かい対応を行い、それぞれの課題を吸い上げていく体制づくりがより一層重要になることが述べられました｡また、本連合会の会計不祥事についての現況報告がありました。

その後議題に入り、議長に小澤俊通副会長が選出され、議事録署名人に山西幸子氏（青森)、千葉亮子氏（山形）が選出されました。

■審議案件（1）令和４年度会費（案）について

審議内容の重要性を鑑み、２月 28 日開催の常任理事会にて協議し、３月 14 日開催の団体長会・理事会合同会議にて審議することとなりました。

■審議案件（2）参議院議員選挙の対応について

令和４年７月に予定されている参議院議員選挙に向けて、山谷えり子参議院議員からオンライン上にてあいさつがありました。山谷参議院議員からは幼児教育の重要性や引き続き、私立幼稚園等の環境整備に努めていく旨が述べられました。本連合会の推薦議員としての審議を行い、賛成多数で承認されました。

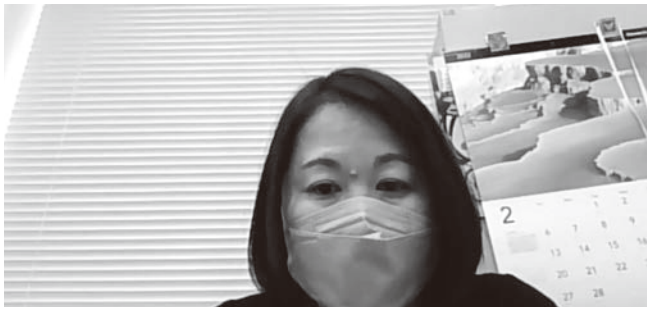
■報告案件（1）ガバナンス強化特別委員会からの報告について

角谷正雄ガバナンス強化特別委員長から、組織運営の透明化を図るため、会則等の変更や会計処理に関する事項について、特別委員会内にて協議を重ねている旨が報告されました。また、組織の改正案の提案がなされましたが､次回以降の諸会議において、改めて提案を行い、協議することとなりました。

■報告案件（2）令和４年度幼稚園関係予算案について

山谷えり子氏（参議院議員）

八田和嗣氏（文部科学省高等教育局私学部私学助成課長）


大杉住子氏（文部科学省初等中等教育局幼児教育課長）

八田和嗣文部科学省高等教育局私学部私学助成課長から、令和４年度幼稚園関係予算案について、説明がありました（注 2)。特に、令和４年２月から実施される幼稚園の教育体制支援事業としての「保育士・幼稚園教諭等に対する 3%程度（月額 9,000 円）の処遇改善」に取り組むためのスキームについて、説明がありました。

続いて、大杉住子文部科学省初等中等教育局幼児教育課長から、幼児教育課関係の令和４年度幼稚園関係予算案について、説明がありました（注３）。保育士・幼稚園教諭等の処遇改善については、私学助成園同様に、新制度移行園に対しても３%程度の引上げを念頭に措置がとられる旨の説明がありました。

■報告案件（3）会務運営報告について

各委員会委員長およびプロジェクト座長から会務運営報告がありました。続いて、（一財）全日私幼研究機構・安家周一理事長から全日私幼研究機構に関する報告がありました。毎年実施している「教育研究体制充実のための補助」および「PTA しんぶん協力費」について、本年度は助成を行わない旨が説明されました。また、令和４年度賛助会員の会費制度について、引き続き１口 250 円にて継続する旨が報告されました。

■その他

坪井久也総務委員長から以下３点の説明がありました。

・各地区から出された全日私幼連への要望について
・学校法人制度改革特別委員会について
・今後の会議スケジュールについて

最後に、角田道代監事より監事所見があり、四ツ釜雅彦副会長から閉会のことばが述べられ、終了しました。

（総務委員長・坪井久也）

＜動画視聴 QR コードについて＞

動画をご視聴の方は、下記 QR コードよりご視聴ください。また、一部音声に乱れがございます。ご理解賜りますようお願い申し上げます。

注１：全日私幼連・田中雅道会長からのあいさつ

注２：八田和嗣文部科学省高等教育局私学部私学助成課長からの報告

（動画）　（資料）

注３：大杉住子文部科学省初等中等教育局幼児教育課長からの報告

（動画）　（資料）

チャイルドブックの月刊保育雑誌

Pot

定価1,100円（本体1,000円＋税10%）
www.childbook.co.jp/pot/

2022年度のPotは
大特集 & プチ特集 の
W特集で
保育力アップ！

さらに「Pot指導計画」は
毎月付録になりました。
指導計画はポットにおまかせ！

チャイルド本社
〒112-8512 東京都文京区小石川 5-24-21
TEL 03-3813-2141　FAX 03-3814-3392
www.childbook.co.jp/pot/

ご注文は、貴園担当のチャイルドブック販売店または書店まで。

● 2・28 常任理事会

令和４年度事業計画・予算等を議決

令和４年２月28日、オンライン形式にて常任理事会が開催され、27人が出席しました。

はじめに、尾上正史副会長から開会のことばがあり、引き続き田中雅道会長からあいさつがありました。会長あいさつでは、すべての子どもたちに良質な幼児教育を提供すべく、現状と課題を踏まえ、次年度以降、組織の体制づくりと情報発信を行っていきたい旨が述べられました。

その後議題に入り、議長に安達譲副会長が選出され、議事録署名人に田中圭子氏（東京）、徳本達之氏（福井）が選出されました。

■審議案件（1）令和４年度会費（案）の件

令和４年度の会費および会費の算出について、坪井久也総務委員長から説明がありました。令和４年度の会費は、[園割会費 9,000 円／園]、[園児割会費 70 円／園児] を納入していただくことが審議され、賛成多数で承認されました。

■審議案件（2）令和３年度補正予算の件

令和３年度補正予算について、坪井久也総務委員長から説明がありました。審議の上、賛成多数で承認されました。

■審議案件（3）令和４年度事業計画の件

令和４年度事業計画について、各委員会委員長およびプロジェクト座長から説明がありました。審議の上、賛成多数で承認されました。

■審議案件（4）令和４年度収支予算の件

令和４年度収支予算について、坪井久也総務委員長から説明がありました。審議の上、賛成多数で承認されました。

■協議案件（1）役員改選の件

役員改選について、坪井久也総務委員長から手続きやスケジュール等の説明があり、田中雅道会長から補足説明がありました。田中会長は、会長候補者の選出については、理事会にて設置することを検討して欲しい旨の提案がなされ、協議の上、理事会へ常任理事会としての案を上提することが承認されました。

■協議案件（2）ガバナンス強化関連資料の件

角谷正雄ガバナンス強化特別委員長から、「こうすればよくなる全日私幼連」並びに全日私幼連組織の提案があり、次回以降の諸会議にて協議すべき案件および長期的な課題として捉え協議を重ねるべき案件について、説明がありました。また、本連合会のガバナンス体制の現状と課題について、全日私幼連事務局から報告がありました。

■協議案件（3）地区活動事業、奨励事業、地区別教育研究会への対応の件

地区活動事業、奨励事業、地区別教育研究会への対応について、坪井久也総務委員長から説明がありました。地区活動事業については、すべての都道府県より会費が納まった段階において、速やかに令和３年度の地区活動事業に関する経費を地区会にお支払いすること、奨励事業については、都道府県団体事務局に令和３年度内にお支払いすること、地区別教育研究会については、新型コロナウイルス感染症の影響などにより、すべての地区が助成対象の研修会を開催していないことを鑑み、開催に伴う固定費のみお支払いすることを協議し理事会に協議事項を上程することが承認されました。

■報告案件（1）令和３年度の加盟園数、園児数の報告の件

令和３年度の加盟園数、園児数の報告（お願い）について、坪井久也総務委員長から報告がありました。

■報告案件（2）委員会からの報告の件

（一財）全日私幼研究機構・安家周一理事長から今後の機構の取り組みについて報告がありました。令和５年度を目途に、研修動画配信（オンデマンド形式）のシステム構築に取り組んでいることが報告されました。また、広報紙『PTA しんぶん』および『私幼時報』における今後の発行形態に関する報告がありました。

続いて、水谷豊三政策委員長から都道府県振興対策に関するアンケート実施・集計結果の報告がありました。

最後に、岩堀法隆監事より監事所見があり、四ツ釜雅彦副会長から閉会のことばが述べられ、終了しました。

（総務委員長・坪井久也）

同調意識蔓延の中での自律性

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構
理事長　安家　周一

■こどもの城

少し前の話になりますが、東京青山にあった「子どもの城（1985 年創立）」が老朽化などのため取り壊されるということと、その跡地に児童相談所・防災拠点の建設計画が公表されました。東京の一等地の目立つところに児童相談所ができることは、しんどい親や家庭、子どもを救済するシンボルになることもあっていいことだな、とうれしく思っていました。ところがそんなものを建てたら地価が下落する、と近隣住民が騒ぎ始めたということが後日報道されました。

新聞や報道で、子どもの虐待案件が頻繁に報道され、そのたびに心が締め付けられる思いをしているのは私だけではないと思います。多くの人がその惨状に心を痛め、子どもの恐怖心を思うと、もっと早く救出できなかったのかと憤ります。青山の一等地に住んでいる人たちも大方同じような心持になられるはず、と推察しています。しかし、自分の家の近所に、児童相談所が来るのは、それとこれは話が違うのでしょうか。

幼稚園や認定こども園、保育所などを新設する時にも同じような経験をいやというほどしてきました。「子どもは宝」と言いながら、こんな静かな住宅地に園を建てるなんて！と詰め寄られます。「住宅地だから施設が必要です」、「静かな環境だから子ども達の環境としては最適な環境です」、と何度もお話ししても平行線でした。「皆様方にもお孫さんがおられるでしょう？」とお尋ねしても、「園のおかげで地価が下がる！」、(≒根拠はありません)、「自分の孫はもう中学生だから関係ない！」などと支離滅裂なことを主張される始末。地域の迷惑施設視されることもある乳幼児期の施設です。つくづく自分の園を大切にしながら、近隣地域や環境に目を配り、独善を慎むことが大切で、俯瞰的に自園を見つめる視野が求められます。

■未来を予測する力と相手の身になって考える力

動物の中で、未来のことを考えたり、人の気持ちになって物事を判断したりする知恵は、人間だけに与えられている能力です。（だと思っていました）私はこれまで文化人類学ではそのように解釈されていたと思っていましたが、近年ゴリラの研究（注 1）で、ゴリラも私たちと同じような社会性や家族愛があることを知りました。それぞれが尊重され、幸せを追求することのできる社会を形成する力はとても大切です。幼児教育においても「私は私、私はみんなの中の私」ということを、いかに大切にするかの営みであるといってもよいと思います。これは、民主主義の基本的理念と共通します。私だけ、今さえよければではなく、そこそこ幸せで、未来に希望を抱いて生きてゆく人に育つように私たちは毎日現場で心を砕きます。

ここのところ、コロナ同調圧力や他人への監視の視線など排他的な傾向が強まっているように感じます。大正 11 年生まれの父母から聞いて心に残っている第 2 次世界大戦に向かう時期の日本で起こった空気感と、似ているのかもしれません。いやでもコロナで視野が狭くなってしまう現在、冷静に時代を見る視野を私たち大人は大切にせねばと思います。

参考文献
注 1：山極寿一（2014）『「サル化」する人間社会』集英社インターナショナル

お知らせ
私幼時報 3 月号（令和 4 年 2 月 10 日発行／ VOL.444）6 ページ本文にて「これまで現職ではなく、免許状更新講習を受講していなかった幼稚園教諭免許保持者たちも、免許状の効力が復活する」と記述した件については、法律の改正をもって正式決定となります。
正式な発出がありましたら、都道府県団体事務局様にご連絡を差し上げますので、いましばらくお待ちください。

令和 3 年度全国研究研修担当者会議ハイブリットで開催される

3 月 8 日､東京･アルカディア市ヶ谷において（一財）全日私幼研究機構の令和 3 年度全国研究研修担当者会議が対面とオンラインのハイブリットで開催されました。全国の研究研修担当者 91 名の方が参加し、報告やグループワークが行われました。

まず初めに安家周一・（一財）全日私幼研究機構理事長より開会のあいさつが行われた後、岡本和貴研究研修委員長より趣旨説明が行われ報告が以下の通り行われました。

・「令和 4、5 年度教研課題について」
　岡本和貴研究研修委員長
・「機構の現状について」
　加藤篤彦専務理事
・「機構の未来について」
　安家周一理事長
・「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会について」
　宮下友美恵副理事長
・「家庭教育力の向上のために－ PTA しんぶんの活用について－」
　川名マミ調査広報委員長
・「保育環境研究部会の今までの取組とこれからについて」
　平林祥保育環境研究部会長
・「ECEQ® のこれからについて」
　岡本潤子 ECEQ® 専門部会長

安家周一・（一財）全日私幼研究機構理事長

この後、各都道府県での研修等の取組を共有し、これからの研究研修の在り方を討議しました。ハイブリットでの会議でありながら、参加者同士が活発に意見交換を行いました。

最後に、宮下友美恵副理事長より閉会のあいさつが行われ、終了しました。

保育力の向上のために　資質向上の取組の証明に

キャリアパスや免許更新のために
研修の記録を大切に残しておきましょう！

監修　一般財団法人 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

改訂新版 研修ハンドブック

●B6 判
●112 ページ

4145301　**税込 660 円（本体 600 円）**

ご用命は最寄りのワンダー販売会社、または書店まで

世界文化ワンダー販売
Tel. 03-3262-5128（営業）

令和４年度　私幼時報の掲載記事について

令和３年度より全日本私立幼稚園連合会と（一財）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構の運営を今まで以上に独立性が高いものとすることを推進しております。

その一環として令和４年５月号（令和４年４月10日発行）より私幼時報を全日本私立幼稚園連合会の機関誌として独立させ、掲載記事を下記通りといたします。ご確認ご了承いただきますようお願いいたします。なお、令和３年度まで私幼時報に掲載していた（一財）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構の関連記事は令和４年度より発行する新たな機関誌に掲載して配布する予定です。

令和４年度の私幼時報掲載記事予定

◇視点
◇全日私幼連会長・各委員会等の報告
◇年間連載
◇おたより
◇その他（私立幼稚園・認定こども園に関する情報を掲載予定）

「こどもがまんなかしんぶん」ついて

令和３年度まで賛助会費の御礼として配布していた月刊紙「PTAしんぶん」（8月は休刊）が、令和４年度より「こどもがまんなかしんぶん」として名称を新たにするとともに内容をより充実させて発行いたします。さらに、保護者の方々のニーズに叶える新たな試みとして、デジタル配信も併用しながら発行する運びとなりました。今まで以上に子どもたちが家庭で過ごす時間が豊かになるよう事業を行ってまいりますので、ぜひ 賛助会員としてのご入会を心よりお願いいたします。

「こどもがまんなかしんぶん」（年11回発行）の配布について

◇紙媒体７回　◇デジタル配信４回
※令和４年度においても全園児配布を行う予定です。

全日本私立幼稚園連合会・広報委員会
（一財）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構・調査広報委員会

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

こどもがまんなか PROJECT

第13回ようちえん絵本大賞

～新しい絵本を見つけよう～

大賞 13冊が決定

第13回ようちえん絵本大賞は、“子どもに読み聞かせたい絵本”、“お父さん・お母さんに読んでほしい・お薦めしたい絵本”、“まだ多くには知られていない素晴らしい絵本”を選考の基準として、(一財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構・調査広報委員会が過去おおむね8年以内に出版された絵本の中から選出いたしました。本年度もコロナ禍の影響により、対面式で「ようちえん絵本大賞」の選考会を開催することができなかったため、調査広報委員会委員がそれぞれ薦める絵本、計13冊を大賞として発表いたします。

調査広報委員一同、これからも子どもたちと絵本との出会いの一助となるよう努めてまいります。なお、参考までに調査広報委員会が絵本の紹介文を記載させていただきます。

第13回ようちえん絵本大賞　受賞一覧

絵本名・作者・出版社名	絵本の紹介
おんなじ　だあれ？ しもかわらゆみ（作） あかね書房	絵本ページの小さい穴から見える動物の体一部から当てっこする遊び絵本。簡単に答えられそうで中々難しく、子どもの想像性から考えを引き出すきっかけになる。描かれる動物絵がとても繊細で可愛い作品です。
どうしてパパとけっこんしたの？ **どうぶつたちそれぞれのこたえ** 桃戸栗子（作） 福音館書店	タイトルの通り、親子の間で、子どもが質問をして親が答えるということがあるのではないでしょうか。その風景を、様々な動物の親子の言葉で豊かに表現されているこの絵本は読んでいて心が温まります。
雪の花 セルゲイ・コズロフ（原作） オリガ・ファジェーエヴァ（絵） 田中友子（文） 偕成社	大晦日に蝋燭を持って来るはずのクマ君が熱を出して寝込んでいるとの知らせを受けたクマ君ととても仲の良いハリネズミ君が、クマ君の熱を冷ますための「雪の花」を探して無事に戻ってくるファンタジーを感じる物語です。
おひさまがおちないように チュ・チョンリャン(絵) クオ・ツェンユアン（作） 青山大樹・廣部尚子（翻訳） ライチブックス	ぽかぽかとあたたかく心地良いおひさまの光。ずっとずっとおひさまに出ていてほしい！そんな願いを叶えるべく、動物たちが奮闘します！ラストシーンはクスっと笑って、本当におひさまがのぼって来たような温かい気持ちになれるはず。今、目の前で起こっていることに夢中になれる、そんな作品です。
やぁだ！ マルリョケ・ヘンリヒス（作） 木坂涼（訳） BL出版	3歳になると自我が発達し、何でも「やだ！」と、ママの言うことに素直になれない姿が良く見られます。この絵本の「子うさぎ」もまさにそんな時期。でもママは、絶対に「～しなさい」とは言いません。「子うさぎ」がやってみたくなるような環境を用意したり、魅力的な言葉がけをしたりして、子うさぎを導きます。こんな親子関係で、「いやいや期」を乗り越えられたらいいですね。
たこやきのたこさぶろう 長谷川義史（作） 小学館	終始関西弁で繰り広げられるお話の中に、なぜか江戸っ子言葉を話す主人公。個性ゆたかなキャラクターもたくさん出てきます。読み手の工夫で子どもたちも大盛り上がり。読み手の技量も試される作品です。

絵本名・作者・出版社名	絵本の紹介
くまちゃんがちいさくなっちゃった トム・エリヤン（文） ジェーン・マッセイ（絵） なかがわちひろ（訳） 光村教育図書	赤ちゃんの「ぼく」は大きなくまちゃんをお父さんからもらいました。クマちゃんはずっと「ぼく」と一緒で、大切な友だちですが、気が付けばクマちゃんはだんだん小さくなっていきます。そして「ぼく」も一人立ち。 子どもの成長が優しい表現（絵や言葉）で描かれていて、可愛らしく温かな感じがするのと同時に、ちょっぴり切ない気持ちにもさせられます。大人が子どもの成長を喜び、また懐かしむ気持ちが心に残る作品です。
おおきなうみとちいさなマーヴィー H@L（作・絵） フレーベル館	ひとりだちするおにいさんを見送るくじらのマーヴィー。もし自分だったらどんな海でどんなふうに暮らそうかなぁ。何になろうかなぁ。歌手になってコンサートを開いたり、旅芸人やおまわりさんもいいなぁ。毎日毎日わくわくしながら未来を思い描きます。 人生という大きな海にこぎだす小さな子どもたちが自分の可能性に気づける絵本です。
海とそらがであうばしょ テリー・ファン（作） エリック・ファン（作） 増子久美（訳） 化学同人	絵本の魅力は絵の美しさにあります。柔らかい色味ながら美しい絵と、登場する魚や鳥たちの大胆なタッチに引き込まれていきます。おじいさんとフィンの絆も見え隠れして、切なさもちりばめられた作品です。
秋 かこさとし（著） 講談社	『からすのパンやさん』でお馴染みのかこさとしさんは 2018 年に 92 歳で亡くなりました。亡くなったあとで娘さんによって発見され、2021 年に出版された本書は、かこさんの遺した膨大な作品群の中でも珍しい、「戦争」についてのお話です。秋が一番好きな季節だったというかこさんにとって、その年の秋は生涯忘れられない秋になりました。戦争を心底憎んでいたかこさんの、痛切なメッセージが、いま時を超えて私たちの胸に突き刺さります。
わたしのかみがた 樋勝朋巳 ブロンズ新社	わたしがなぜこの髪型になったのかその変遷と理由を語ります。昔は短い髪の毛だったこともある。だんだん伸びて、長い髪を黄色にしたり、赤くしたりしたこともある。 髪型が変わるたびに、洋服もカラフルになり、表情もくるくる変わります。いいときも、悲しくなるときもありました。髪型のことではありますが、まるで人生のいろいろな場面のようです。
〈きもち〉はなにをしているの？ ティナ・オジェヴィッツ（文） アレクサンドラ・ザヨンツ（イラスト） 森絵都（訳） 河出書房新社	「〈こいしさ〉は、マフラーのにおいにひたる。」「〈どきょう〉は森のまんなかでひとやすみ。」等、心の中に宿る感情たちが登場人物。感情を表す詩のような言葉たちが実にしっくりと腑に落ちるのです。自分が抱いている種々の感情に、正であれ負であれ、愛おしさを覚えました。
おはいんなさいえりまきに 角野栄子(作) 牧野鈴子(絵) 金の星社	私たちに≪人（ひと）≫としての優しさの大切さを訴えかけています。親である誰しもが、わが子について、優しい人間に育ってほしいと願っています。でも、どうすれば優しい人間に育つか。わかりません。もしかしたら、この絵本が、いや、絵とストーリーが子ども達の心を優しさに向けて静かに手引きしてくれるのではないでしょうか。

幼児が遊び込める環境構成と教師の援助を探る

冨谷　知子(学校法人　中仙道幼稚園)　　大山　真実(学校法人　中仙道幼稚園)

研究テーマ設定の理由

教師は遊びをどう捉え、どこまで、どのように遊びに関わればよいのか、幼児よりも遊びに関わり過ぎたり、出過ぎたりしてはいないかなどの悩みを抱えていた。そこで、研究テーマとして「幼児が遊び込める環境構成と教師の援助を探る」と設定し、遊びの充実を図り、幼児が心から楽しみ遊び込む幼児の姿を求め、研究を進めていくことにした。

研究方法と内容

(1)研究テーマの共有と仮説を立てる

(2)エピソード記録から読み解く

(3)仮説を立証する

遊び込む姿の共有

＜3歳児の遊び込む姿・援助の仮説＞
・環境構成☆教師の援助の仮説
〇興味をもつ
・安心できる環境
☆ありのままの姿を受け止める　☆信頼関係を築く
〇してみたいと感じる
・してみたいと思えるような環境
☆幼児の思いを受け止める　☆内面理解をする
〇好きな遊びを見付ける
☆一緒に遊びを楽しむ
〇繰り返し遊ぶ
・幼児の興味に沿った環境　・興味をもつことができる環境　☆遊ぶ時間の確保

＜4歳児遊び込む姿・援助の仮説＞
〇興味・好奇心
・幼児の興味を取り入れた環境　・幼児の興味に合わせて、環境を再構成　☆幼児の思いを受け止め見守る　☆教師も一緒に遊びを楽しむ　☆幼児の思いに寄り添い、共感したり提案したりする　☆遊びの振り返りをする時間をもつ
〇してみようとする
・自由に遊びを選ぶことができる環境　・いろいろな遊びを経験できる環境　☆遊び込める時間の確保
〇繰り返し遊ぶ
・遊びを引き続き楽しめる環境　・試したり工夫したりできる用具や材料の準備をする
☆繰り返し遊ぶことができる時間や場所の確保
〇主体的
・興味をより深められる環境(図鑑や絵本など)
☆幼児の思いに共感する

＜5歳児の遊び込む姿・援助の仮説＞
〇興味・好奇心
・幼児の目に入りやすい遊びの場の設定
・視覚的な刺激となる環境(絵本や写真など)
〇目的をもつ
☆クラスで遊びの話題の共有、話し合いをする
〇試行錯誤
・選択できる用具、材料の用意
・道具や空間を自由に使える環境
〇持続
☆一緒に考えたり、考えるためのヒントをタイミングよく出したりする
〇人との関わり
・友達と協力し合える材料の大きさや数の準備
☆教師も友達の一員となって一緒に遊ぶ
〇主体的
・したいことが自由にできる環境　☆幼児に任せる
☆幼児の思いに寄り添う　☆自由に思いを出したり、表現したりできる空間、雰囲気を作る

実践事例・考察

3 歳児『泥遊び～ぺたぺたがりがり～』
『どれがいいんだろう？』

4 歳児『あのセミを捕まえたい！』
『本物みたいなシャワーにしたいの！』

5 歳児『シャボン玉に入ってみたい！』
『ドングリレーシングカーで遊ぼう！』

幼児が遊び込んでいる新たな要因（仮説と同じ要因は除く） ●環境の新たな要因
★新たに捉えた教師の援助

（3歳児）
●一人一人が満足できる豊富な材料や道具の環境
●道具や材料を自分で選んでしてみることができる環境
●引き続き遊ぶことができるように思い出すきっかけとなるような目に付く環境
●発達や季節に合った環境
●感触や性質の違いに気付けるような環境
●異年齢児から刺激を受けたり関わったりすることができる環境
●幼児が偶発的に出会う場、機会
●次の展開を見通した環境を再構成
●発見したり不思議に思ったりする感情体験のできる場や物
★クラスで遊びの紹介をし、興味をもてるようにする
★周りの幼児がしていることに関心がもてるようにする

（4歳児）
●異年齢児の姿から刺激を受ける場、機会
●目に付きやすい場所に環境を用意する
●必要な時に手に取りやすい素材・用具の準備
●幼児が自分達で遊びの場を作れるような環境
●幼児が作った遊びの場を使いやすいように整える
●遊びが継続できるような環境の配置
★状況を言葉にして説明することで、幼児が自分でしていることを再認識したり、考えるきっかけとなるようにしたりする
★幼児の姿や遊びを通し幼児理解を深め、友達同士を繋げる

（5歳児）
●教師が携わらなくても、幼児が自分で扱いやすい用具、材料の準備
●幼児の実態に合わせ、願いに沿った環境の再構成
●遊びと遊びが繋がる為の場の配置
●友達からの刺激が受けられるように、作った物を置く場所
●遊びが継続できるような環境の設置
★教師が一緒に（制作物などを）作ることで、きっかけ作りとなるようにする
★状況を言葉にして説明することで、幼児が自分でしていることを再認識したり、考えるきっかけとなるようにしたりする

研究成果

○幼児の変化
＜3歳児＞　繰り返し遊ぶ姿、自分からしてみたい、こうしたいと思いを出しながら遊ぶ姿が増えた。

＜4歳児＞　遊びを繰り返し楽しむようになったり、友達と関わりながら楽しんだりする姿が増えた。

＜5歳児＞　自分達で遊び方を考えたり、してみようとしたりする姿が増えた。

○園内研修（研究）を通して、教師自身の保育に対する考え方や気持ちの変化
・幼児の言葉や表情、行動に対して、興味や関心、気持ちや内面を教師がどう読み取り、どう捉えるかが大切だということが分かり、まずは幼児の願い（こうしたいという思い）を意識して探っていくようになった。
・幼児の姿から指導計画をしっかりと立て、幼児に何を経験させたいのか教師がしっかりと願い（ねらい）をもって関わることが大切だと分かった。そして保育を振り返り、環境を再構成していく大切さを改めて感じた。
・遊びを援助する際に、教師の思いが出過ぎていないかと迷い、援助のタイミングを逃してしまうこともあった。しかし、その時に考えた援助を実践し、目の前の幼児の姿の変化を観察したり、援助を振り返り、反省や修正をしたりしていけばよいのだということが分かり、以前よりも幼児との関わりを楽しみながら保育ができるようになった。

今後の課題

研究を通して、幼児が遊び込む為の環境構成と援助を探るにあたって、まずは幼児理解をすることの大切さを改めて感じると同時に、読み取りの難しさも感じている。幼児の言動に対して教師がどう読み取り、どう捉えるかによって、援助の仕方も変わってくると考える。その為、今後も記録をとり、その積み重ねから理解を深めたり、教師間で情報を出し合い多くの目で捉えたり、写真やビデオでの記録を活用したりするなどして、様々な方法、角度から幼児理解について深めていきたい。そして、これからも楽しんで保育を行いながら、幼稚園全体で組織的、計画的に専門性を高めていきたい。

子どもの主体的な活動としての遊びが充実するための環境を考える
～主体性の育ち、そして友達とのつながりを求め続けて～

田吹　加奈子（別府大学附属幼稚園）　菅原　航平（別府大学短期大学部）

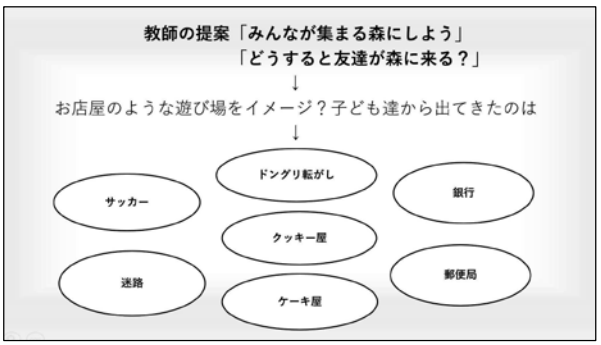
１，５歳児保育実践

（１）新たな環境に期待をもってかかわった進級当初とそこから生じたズレ

５歳児になった喜びから年長組ならではの活動などに期待をもって取り組む姿が見られた。教師の願いが先行したねらいを立ててしまったがために、子どもの実態と教師の願いとのズレが生じた。園内研修によって教師の願いと子どもの実態とのズレに気付き、子ども達が主体的に環境にかかわって遊べるよう一人一人が夢中になっている姿を見つめ直した。

（２）悪戦苦闘の２学期（森タウン）

運動会を終え、１学期も遊んでいた森へ行く姿が増えていた。子ども達は枝やドングリなどの自然物や木々の間など場を取り入れながら木の実ケーキ作りやドングリ転がしなど、イメージしたことを実現させようと遊び始めた。



そこで、今度こそは自分達で共通の目当てに向かって遊びを創っていってほしいと予想し、右図のような提案をした。教師はより遊びの全体像がイメージできるようにと考え「森タウン」と名付けた。そして、イメージが共通化していくだろうと話し合う場と時間をとった。

その話し合いのポイントは下記の３つである。

① ７つの遊びの中で自分はどの遊びをしたいのか考える。
② 同じ遊びを選んだ友達と“お客を集める方法”を考える。
③ そのために必要な場、ものなどを出し合っていく。

その話し合いの中で“本物らしく”が共通の目当てとなったクッキー屋は、誰もがイメージしやすいこともあり用意する材料への意見が豊富だった。ものを準備しながらお店として成立させるために役割分担をし始めた。役割があり、自分のアイディアや意見が活かされながらクッキー屋らしくなっていく経験により、主体的にかかわる姿へとつながっていった。

一方、遊びのイメージがつながっていかないサッカーチームは、「サッカー」という意見が出ていたが園庭でのサッカーゲームを楽しみ森へなかなか移動しようとする姿はなかった。「森でもサッカーできるよ。」との提案に子ども達は森の中のサッカーができそうな所までゴールを運んだ。しかし、木の根や岩などがある森の中では、思うように試合ができず徐々にウロウロする姿が増えた。それでも、“森タウンを作る”という教師の思いや周りの遊びの様子から的あてゲームのようにして、的や景品を作るなどして自分達なりに気持ちに折り合いをつけて参加した。

意見を出し合ったクッキー屋とサッカーチームの遊びの取り組み方の違いに対して、右のように反省をし、いよいよ３学期を迎えた。

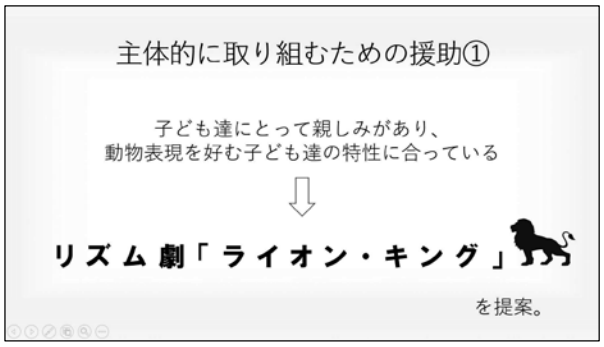
○「お客さんを呼ぶ森にしよう」という話し合いで「サッカー」と提案した子どもが、どのような思いやイメージを抱いていたかを深く探るべきだった。

○「サッカー」という遊びが森タウンでの展開に無理があったのではないか。

○“サッカーをしたい”という気持ちがどれくらいの強さかと感じ取る心、判断する力が必要だった。

（３）主体性に出逢えた生活発表会

“させられる会”ではなく「自分で・自分から・自分達で」と主体的に取り組む会であることを大切にし、このような援助を考えた。

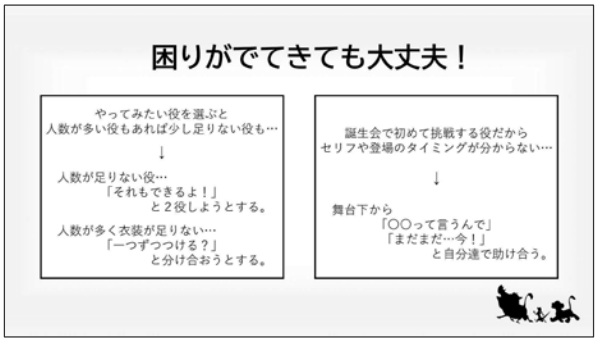


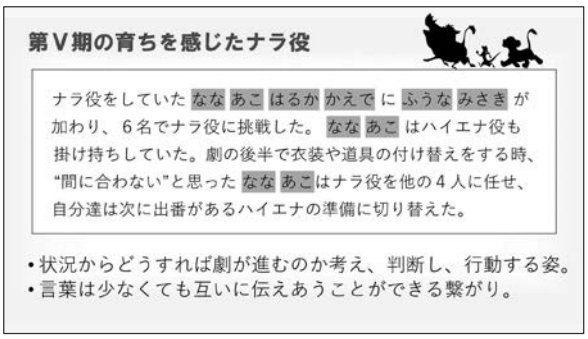
すると「“したくない”という言葉や拒む姿を見せる子どもがいない」「“僕は役が絶対にしたい”と意思をもっている」「表現が苦手な子どもがどうしたらできるかと自分で考えている」など“森タウン”とは違う姿が表われた。このような姿からリズム劇に向かう姿が一つになっていくのではないかと期待を高めた。当日は、大勢のお客さんに見てもらう緊張と喜びの中でそれぞれに力を出していき、会の終了後には安堵と自信の表情を見ることができた。

翌日より、鬼遊びやサッカーなど仲間と相談しながら遊び込んだり「ライオン・キングがしたい。」と何度も役を変えて楽しみ他学年の友達に教えたりするなど、ものや人など様々な環境に進んでかかわった。

預かり保育の時に「H 先生は発表会を見てないから見せようと思う。」と担当の先生が来る前に人数を集めて練習を始めた。その姿を見て全職員で「今が主体性の姿では？」「クラスにこの思いが伝わるのでは？」と話し合い、“３月の誕生会で披露してみてはどうか”と子ども達に相談した。「やるやる！」と声があがり、役は今までの役でするか、やってみたい他の役をするかを問いかけ、自分のしたい役を選ぶことになった。

そのため人数が多い役もあれば少し足りない役も出てきたが、無理に役を埋めようとするのではなく、子ども達に任せてみることにした。すると、下記の姿が見られた。





２，振り返りとまとめ

（１）「子ども達が主体的に活動し、充実して遊ぶ姿」とは次のような姿ではないか。

① 同じイメージをもち、それぞれの考えを出し合い友達と一緒に作っていく姿

② 友達と共通の目当てに向かい、互いの力を出して認め合って遊ぶ姿

③ クラスの目当て達成に向かって、仲間と力を合わせて遊びを進める姿

（２）子どもの主体的な活動としての遊びが充実するための環境とは

① 具体的なねらいにあった環境を作り出すためには“興味をもつこと・ものは何か”とアンテナを張り“何に面白さを感じているのか”“どのように面白くしようとしているのか”を読み取る。

② 仲間の中で自分の存在や力を発見し、自己発揮できるように“たっぷりの時間”や“思う存分に活動できる空間”を保障するとともに、“認めてくれる友達や教師の存在”が必要である。

③ 遊びの展開を考えていく時、“一人の遊びを仲間とつなげるよう広げる援助なのか、”子どもの関心を支えじっくりと取り組みながら次に発展させる深める援助なのかを姿から判断できるようにすること。さらにそのためには教師が「遊びの見通しをもつ」ことが大切。

幼児の内発性と創造性に関する一研究

―ライトテーブル及び OHP などを使用した遊びを中心として―

○関 龍太郎（やはた幼稚園）　浅見 均（青山学院女子短期大学）
関 政子（やはた幼稚園）　川島 久美子（やはた幼稚園）　白石 奈美（やはた幼稚園）

Ⅰ　研究動機

本研究は、ライトテーブル、OHP などを使用した本園の遊びのプロジェクト「光と陰」を手掛かりに研究を行ったものである。研究体制は、保育者、芸術家、影絵劇の専門家、大学教員からなる。プロジェクトは主に本園ホールに設置した「光と陰の部屋」にて行ったもので、上記の機器の他に色付きアクリル製透明積み木や、セロファンや紙、パッキン材を含む透明、半透明、不透明のマテリアル、自然物として（貝殻、木片など）などが用意されており、子ども達にとって新奇で魅力的な空間となっている。そこにおいて子どもたちはどのように内発的な行為としての遊びを展開、創造して行くのかということ、つまり子どもの内発性（自らやってみたいという心）が芽生え、遊びが創造されていくのかということに着目した研究である。

Ⅱ　研究の期間及び対象

期間：2020 年 11 月から 2021 年 3 月まで
対象：やはた幼稚園年長組園児

Ⅲ　研究の方法

やはた幼稚園多目的ルーム内ミニアトリエコーナーにおいて、今まで幼児が使用したことのない機材として、ライトテーブル、OHP、プロジェクター、ミラーテーブル、スクリーンなどの機器と、マテリアルとして様々な透明、半透明なもの、懐中電灯、貝やヒトデ、木の削り屑、松ぼっくりなどの自然物、アクリル製の透明カラー積み木、油性ペン、色付きセロファンなどを遊びの進行状況によって用意した。

それらの機材と、様々な興味深いマテリアルを使って遊ぶ子どもたちの様子を動画や写真に撮り分析を行った。

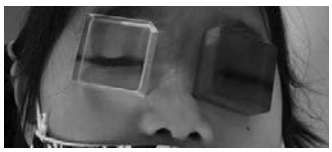
結果及び考察

ここではいくつかのエピソードを挙げ、そこから見えてきたものについて述べていく。

エピソード１＞保育室で作ったものを「ひかりとかげのへや」で試す

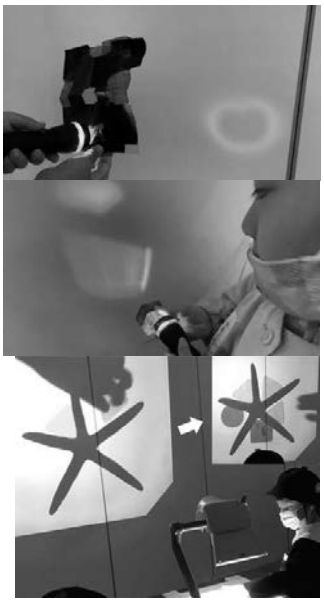
影絵の観劇に触発された子どもたちは、保育室で作ったものを「ひかりとかげのへや」で試すということを始めた。その遊びの様子から、内発性と創造性の観点より考察した。

エピソード２＞新奇な素材としてのアクリル製透明カラー積み木との出会い



２月になり、マテリアルにアクリル製透明カラー積み木が追加された。子どもたちは、今まで出会ったことのない透明カラー積み木を使用して様々な試しをしながら遊びを楽しんだ。その遊びの様子から、内発性と創造性の観点より考察した。

エピソード３＞懐中電灯を使っての創造的遊び



マテリアルに青、黄色、ピンクなど色が出る懐中電灯を加えたことにより、子ども達は、影絵との融合での新しい遊びや、混色、懐中電灯を振ってのダンスなど様々な遊びを楽しんだ。その遊びの様子から、内発性と創造性の観点より考察した。

エピソード４＞S 児における遊びの変容

３月になり、一人一人の遊びが深まり、集中して遊ぶ姿が見られるようになった。ここでは、S 児に焦点を当て、およそ１５分間の中での遊びの様子を内発性と創造性の観点より考察した。

5　結論

レッジョ・エミリア市の幼児教育の魅力的な実践にインスパイアーされ、本園でもライトテーブルなどを保育環境として導入、実践する中で様々なことが見えてきた。

本研究では、内発性（内発的動機付け）つまり子ども自らが、面白そう、やって見たいと思えるような心が芽生えるような環境になりうるのではないか、そしてその遊びは創造的な遊びとなるのではないかといった仮説を立ててみたのであったが、子どもたちの見慣れた環境より、新奇で少しズレた情報としての環境に対して興味を持ち、様々な遊びが展開された。また、その遊びの内容は、今まで経験したことのないものであったため、より創造的な遊びとなった。

これらの研究結果が示唆するものは、保育環境においては、今子どもが興味を持っているものなどから少し珍しいものを環境として用意することによって、子どもの遊びは深まり、また創造的な活動になっていくということであった。

保育者・園長が主体的に学び続けるための研修・研究・評価への取り組みについて
～学びを止めない～

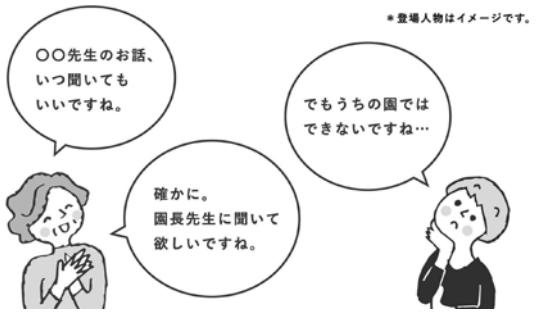
発　表　者　杉本圭隆（むつみこども園）・北島孝通（幼保連携型認定こども園 庄内こどもの杜幼稚園）
平林祥（ひかり幼稚園）・岡部祐輝（幼保連携型認定こども園 高槻双葉幼稚園）
共同研究者　安達譲（大阪教育大学）

学びを止めない

新型コロナウイルス感染拡大により、流行以前と同じ形で園外で学ぶことが難しくなっています。そのような時代にあっても学びを止めず、また、そのような時代だからこそ保育者・園長が個人としてだけでなく、チームとして主体的に学び続けることが大切でしょう。本発表では、保育者・園長が主体的に学び続けるために私立幼稚園団体の教育研究委員会（教研）ができることは何かについて考えるため、大阪府私立幼稚園連盟（大私幼）の研修・研究・評価チームが研修再編に取り組んできた過程と今後の展望を紹介しました。

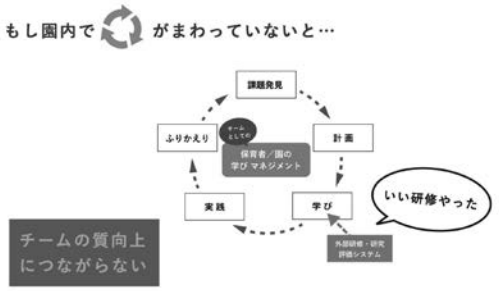
研修企画の課題

これまでの教研の活動をふりかえる中で、研修企画時に場当たり的に講師や内容を決めていたり、たとえ研修の内容が充実していてもそこでの学んだことが園での実践に生かされておらず、学びが園の質向上につながっていないケースがあるという課題が浮き彫りになりました。誰が何を何のために学ぶのか、また、そこでどのような力が育つことが想定されるのかという視点から研修企画を見直し、再編していきました。



チームで学びをマネジメント

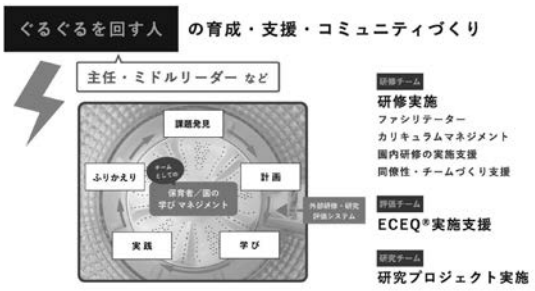
研修再編を計画する上で整理されたことは、保育者の個々の力（子ども理解・ねらい・手立て・評価に関すること等）と同じくらい、トップリーダーがリーダーシップ（理念を伝える・資源管理等）を発揮したり、園をチームとして機能させるための力（チームビルディング・育成力等）が必要だということでした。下図のように、園内でぐるぐるが回っていないと（学びをマネジメントするチームができていないと）、例え保育者個人が学んだとしても、それが園全体の質向上にはつながりにくいため、教研として、園内でチームとしてぐるぐるを回すためのきっかけづくりや支援を行うことに力を入れていきました。



ぐるぐるを回す人の育成・支援

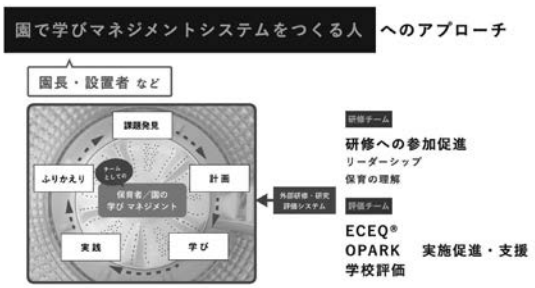
園内で学びのぐるぐるを回すためには、ぐるぐるを回す人とその力が必要です。大私幼では、ミーティングにおいて参加者が対話しやすい雰囲気づくりをしたり、同僚性の高いチームづくりをしたりするミドルリーダー等の育成や支援、コミュニティづくりを進めています。具体的には、ファシ

リテーターのための研修やECEQ®の実施支援、若手保育者を育成する保育者のための研修、保育者が参加する研究プロジェクトを実施しており、今後も拡充させていく予定です。



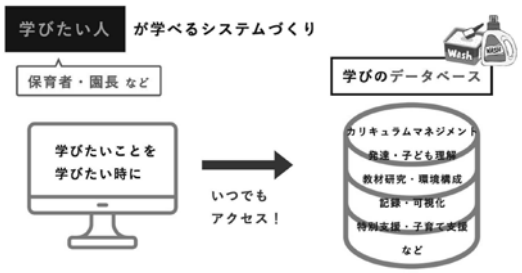
園で学びマネジメントシステムをつくる人へのアプローチ

たとえぐるぐるを回すことのできる力のある人がいても、そもそも園のリーダーがそれを認める風土やシステムが存在しなければチームとして機能することは難しいでしょう。大私幼ではトップリーダーがどのようにリーダシップを発揮していくかについて考えるきっかけづくりに取り組んでいます。例えば、大私幼の理事長直轄事業であるOPARK（オパーク：Open! Preschool Accreditation framewoRK）では、トップリーダーの幼児教育と経営におけるリーダーシップとマネジメントの具体的な取り組みに関する事例を収集・整理し、事例集や研修などの形でアウトプットしています。また、保育への理解や園のマネジメント等、トップリーダーであるにあたって必要な力を向上させるための研修をセットにして実施することを計画しています。



学びたい人が学べるシステムづくり

保育者や園長が主体的に学ぶためには、個人が自身や自園の状況や課題にあった学びの選択が必要ではないでしょうか。全ての研修を対面で行なっていた時には毎年異なる内容のその場限りの研修を実施することが多かったですが、知識や技術を伝達することが目的である研修はオンライン化するとともに、データベースのような研修群を蓄積していき、学びたい人が学びたいことを学びたいときに学べるシステム＝研修のデータベース化を構想しています。これによりいつでも研修にアクセスできるようになり、学びたい人が学びたいことを学びたい時に学ぶことが可能となります。このデータベースは限られた予算や時間、人員でも構築が可能で、全国レベルでの研修の共有も可能ではないかと考えています。現在、大私幼ではその試用段階として、２ヶ月半ほどの期間限定ですが、29の研修が受講可能な大会を開催しており、今後はさらに研修の蓄積を進めていく予定です。



私立幼稚園全体で学びマネジメント

研修再編はまだ始まったばかりですが、定期的にふりかえりをし、計画の見直しを行なっています。今後も対面、オンラインそれぞれの良さを生かして共存させながら、研修・研究・評価を充実させていく予定です。この発表が私立幼稚園全体で学び続けるためのシステムづくりを進めるきっかけになれば幸いです。

令和２年９ 月26日オンラインにて開催された、東京大学大学院教育学 研究科附属発達保育実践政策学センターと全日本私立幼稚園幼児教育研究機構の共催による国際シンポジウム「保育とデジタル―その役割と可能性―」の報告を令和３年９月号より開始し、本号第８回をもちまして、終了とさせていただきます。

パネル・ディスカッション②

司会（野澤先生）

→続き）ではさらに、参加者の方々からご質問が来ていることとも重なるところでは、トレーニングといいますか、プロフェッショナル・ディベロップメント、研修――例えば保育者の方、それから保護者の方に対して、デジタルツールやデジタルの考え方についてどのような研修などを行っているのかというところをお伺いできるとよいかと思います。Fleer 先生からお願いいたします。

【デジタルを活用するためのプロフェッショナル・ディベロップメント、研修について】

Marilyn Fleer 先生

とても大きな質問だと思います。幾つか答え方がありますので、そのように答えさせてください。まず１つ目は、私たちの PlayLab においては、もうすぐスタートするところなのですが、現職向け研修を、広く幼児教育関係者に対して提供しようと考えています。それは、ファミリーデイケアの方もそうですし、また、幼稚園や保育園などで働いている保育者なども含むのですけれども、さまざまな幼児教育に関係する先生方全般に対して現職向け研修を提供していきたいと考えています。

１つ例を挙げていきたいと思います。最初の例は少し長くなりますが、私の事例をお話しします。私たちが研究の一環として展開しようとしていることなのですが、オーストラリア全国の教育者を、現職向け研修を通じてサポートしていくというものです。そしてデジタルツールは、それにフォーカスしたものではないですが、その研修の中では含まれています。「パーソナライズされた現職向け研修」と私が言っているものです。これまで私がやったことといたしましては、まず幼児教育を提供しているセンターに行き、そして保育者を集めて、そこでデモンストレーションするのです。

また別の現職向け研修もあります。こちらは保護者と一緒です。というのも、保護者の教育という側面も質問にありましたが、私の同僚がこの研究をリードしています。30 分の読み聞かせなので、保育者が子どもと保護者とを Zoom でつないで読み聞かせをします。翌日にもやはり 30 分の読み聞かせをする。しかしそこで、例えばロールプレイをしたり、同じ物語を使って、先ほどの鶏のロージーだったりきつね役をやったり、そういったことを家でやります。３つ目のセッションというのは、さっきの私の例では、そのキャラクターから電話でメッセージがあったよといった話をしましたけれども、そうゆうふうに展開していきます。なので、まず物語を共有して、それから、何か問題が発生したとして、その問題解決を Zoom を通じてやっていく。そして家庭との関係性としてはそのような虚構のロールプレイをしたり、STEM、科学の知見を身に付けるという中でデジタルツールが役に立ちますよといったことを保護者に伝えていくということです。

そしてこれは現職向け研修のベストプラクティスから導いています。今、（パソコンの画面上に室内を映して）床に見えるのが、その専門家の能力開発に関して、私が読んでいるありとあらゆる論文を床に並べたものです。皆さんもたくさん読んでいらっしゃると思いますが、「批判的な振り返りというのが重要である」、そして「オンラインのアプローチ、もしくはブレンド型のアプローチというのは、とても有益で便利である」ということ。そして「保育者、保護者のモチベーションが大事」ということです。そもそも何でこんなことを学ぶのか、デジタルツールについて知らなくてはいけないのはどうしてなのか。そのモチベーションというのが重要です。そし

て遊びの場というのは、教育、学校とはまた違います。そしてあくまで遊びという環境下でどのようにデジタルツールを使うか、それを探求していかなくてはいけません。ですので現職向け研修の成功の要素というのは、どのペーパーでも同じです。全く同じことをどの論文でも言っています。

しかし、そこに書かれていなくて、私たちが研究で学んだのは、保育者を集めると、彼らは、例えば2時間のコースでの新しい実践で、想像力をたくましく使います。保育者というのはさまざまに想像します。非常にダイナミックです。彼らは新しい実践を想像します。その例を幾つか紹介しますが、本当に彼らは、ある意味、互いがロールプレイをしながら話をするんです。現職向け研修において想像力は本当に重要です。しかし、そういったことは職業訓練でほとんど取り上げられません。シナリオ検証する――ある意味、科学者のように思考の実験をするわけです。子どもたちもそういったこともします。Louiseさんは、私が言うところの思考的な実験というのをたくさん示してくれました。匂いを嗅いでみる、味わってみる、そういったことを、実は、このようなトレーニングを行うと保育者もやります。それではLouiseさん、どうぞ。かなり、頂いた質問の幾つかに同時に回答してしまったように思いますが。

Louise Lowings先生

Fleer先生ありがとうございます。おっしゃったとおりだと思います。幼児教育の保育者たちは、自分たちの現職向け研修でも、本当によくやっていらっしゃる方が多いと思います。自信を持つためには、まず自分たちでそのツールを使ってみるということがとても重要だと思います。まず使ってみる。そして、まずスイッチを入れることができれば、それだけでも一つの大きな達成なのです。ペアで働いているときには、もしかしたらそのパートナーが知識を持っているかもしれないし、その知識を共有することができるかもしれません。また、リサーチグループなどのメンバーであれば、そういったグループを使うことによって知識を深めていくことができます。さらに、全国的または地域的、国際的な組織との関わりの中で学んだことを、自分の学校に持ち帰るといったようなことができると思います。自分の知識だけにとどめておかず、それを共有していくということがとても重要です。

技術はかなり早いスピードで進歩しています。特に2015年以降、私たちはデジタルツールを家庭でも使うようになっています。私も大きく変わりました。スマホを使うようになりました。そして、このプロジェクトに関わったことでスマホを使い始めたということはありますけれども、やはりそれだけでなくても、家族とコミュニケーションを取るために、子どもたちや親たちとコミュニケーションを取るために、どちらにしても使ったと思います。そしてそのツールを使って批判的な思考をし、そしてお互いに学んでいく。とても重要だと思います。勇気を持って新たなツールを使ってみてくださいというのが私のメッセージです。とても面白い時期に私たちは生きていると思います。

司会（野澤先生）

ありがとうございます。最後に、これは頂いたご質問なのですけれども、大切なご質問だったので一つだけ伺いたいのですけれども。デジタルツールとか、例えばFleer先生の動画にあったVRみたいなものを使うときに、子どもたちが現実と非現実の区別がつかないで混乱してしまうというようなことはないのかというご心配などがあると思うのですが、その点についてはFleer先生、いかがでしょうか。

【現実と非現実の往来について】

Marilyn Fleer先生

素晴らしい質問です。バーチャルリアリティーのツールが保育者に向けてデザインされてます。しかし、子ども向けではないんです。ご覧になった動画は、保育者が想像上のプレイワールドに行くためのものなのです。なぜそれをやったかといいますと、私たちが直面した大きな課題の一つは、どうやったら保育者に対して、彼らの役割が、一歩下がったところに立って遊びを見つめることなのだということを理解してもらえるだろうかと考えたときに、その劇中に保育者が入って、そして子どもたちのことを知るということが大変有益であるということが分

かったのです。研究によれば、保育者は子どもと一緒にいることが本当に好きです。そして、劇の中に自分たちも入りたいと思っています。そして、そのわくわく感が関与を高めるわけです。

そして子どもが、保育者と関係を築くときと、その保育者が遊びの中のパートナーだと、関係性が変わるわけです。その劇を子どもたちと一緒にやったときに、子どもたちは、保育者としてではなく、保育者もまた鶏の一羽だというふうに考えるわけです。そこで何が起きるかということを見ますと、子どもたちの劇がさらに成熟するのです。小規模な研究において、子どもたちの劇を見ていきますと、劇が発展していくのですが、そこからさらに深掘りするということが行われないということがあります。一番能力の高い子どもに合わせた深掘りになるわけですけれども、保育者がその劇に関わることによって、幾つかのことが起こります。まず１つ目、保育者はストーリーの中のことをよく知っているので、そのストーリーとのつながりを、よりうまく子どもたちに対して橋渡しすることができるわけです。もちろんその劇を乗っ取るわけではありません。しかし、子どもたちがさらに発展することができるように、想像上の劇を発展させるための支援を保育者ができるということなのです。

さらに、劇の中の複雑性を増加させるということができます。オーストラリアでは、通常は保育室の中に保育者が２人いることが多いので、２人の保育者がプレイワールドの中にいるのです。そして保育者の１人は子どもに「何でうさぎがあそこを走っているのだろう？」というふうに質問をします。具体的な質問をすると、子どもたちは興味を持ちます。そしてそこでもう１人の保育者が特別な科学者のような役割を果たして、「皆さん、今日はうさぎについて学びますよ」というふうに話し掛け、そのストーリーを使いながら子どもの学びを促すという役割を果たすことができるのです。

質問からはちょっと離れてしまうかもしれませんが、バーチャルリアリティーというのは、保育者が、劇の中に子どもたちと入るというのはどういうことなのかという経験をする手段なのです。保育者というのは常に外にいて、そして観察をするような役割を果たしているわけですけれども、保育者たちもまた、子どもたちと一緒に劇の中にいるのはどういう感覚なのかということを学ぶためにこのようなバーチャルリアリティーを作り出しました。これは私たちの研究の中で得られた教育学的な方法論の一つの特徴です。子どもたちと保育者が一緒にいることもできます。そして子どもたちのパートナーになって、一緒に解決法を考えることもできます。そして同時に、子どもに対して「自分は何も知らないから、子どもたちに教えて」というふうに言う役割を果たすこともできるわけです。さまざまな役割を保育者た

遊具：HOUSE

未来は、あそびの中に。

偉大なる発明も、世界を変えた公式も、
あそびから生まれた。
あそびは、すべての創造の源です。
あそぶ力を伸ばすことは、未来を切り拓くこと。
創造力をのばす。共感力をはぐくむ。ルールをまなぶ。
あそびから、こどもは無限の力を羽ばたかせていく。
あそびの環境に、あざやかな驚きを。
私たちは、未来をつくる仕事です。

JAKUETS

ちは話すことができ、さまざまなポジションの中で子どもたちに関わることができるのです。一緒にいることで新しいものをつくり出す。そしてデジタルツールを使うのが怖いと思う子どもたちに、「そんなに怖がることはないんだよ」といったようなことを言う役割を果たすこともできます。バーチャルリアリティーを使うことによって、大人である保育者がその体験をするということが大変重要だと考えています。まだ初期的な段階なのですけれども、今後数年をかけて発展させていきたいというふうに考えています。

Louise さんにも伝えたいのが、これは私たちがやっていることの全てではなく、私たちがやっていることの一部に過ぎないということです。これをやることで現職向け研修に豊かさが加わると考えています。

Louise Lowings 先生

バーチャルリアリティーですね。私は保育室では使っていません。子どもの目が友達を見ることができませんし、手にしている素材を見ることもできません。子どもたちはある意味ずっと仮想の世界に生きているようなものです。私たち大人は VR と現実世界の違いが分かります。しかし子どもにとってはそうではありません。例えばこのプロジェクトを始めたときに、バーチャルリアリティーの教材を私に売ろうとした人がいました。「3 歳の子は、学校の近くにある森にバーチャルで行けばいいじゃないか」と言いました。「音だったり匂いだったりそういったものを足すことができるから」と。私たちはその森に実際行くこともできるのに、そちらのほうがいいと言ったのです。しかし、これは私たちが考える子どもの教育の信念と異なります。われわれは子どもたちが直接的に体験をして、そしてそれをデジタルなツールで後ほど補うということはいいと思いますが、最初からデジタルで、現実世界を体験しないというのでは言語道断です。子どもたちはまずは現実世界を理解して、その後にデジタルな世界との相互作用というのを理解できるようになっていけばと思います。残念ながら、バーチャルリアリティーは、デジタル世界における極めてパーソナルなスペースになっています。もっと大きな子どもではいいのですけれども、幼児に関しては適切ではないと思っています。（おわり）

【CEDEP シンポジウム報告書から一部編集】

画像資料などより詳しくお調べになりたい方は CEDEP の公式サイトにアクセスしてください。
http://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/project_report/symposiumseminar/intlsympo_digital-in-ece-its-role-n-potentiality

（北海道・美晴幼稚園／東重満）

～年間連載　教育・保育の未来について考える⑤～

2021 年 12 月号より一般社団法人家族・保育デザイン研究所、東京大学名誉教授である汐見稔幸氏による年間連載を開始いたします。教育学、教育人間学、保育学、育児学を専門として第一線で活躍されています。幼児教育について注目されている今、より一層理解を深め、日々の幼児教育の参考にしてみてください。なお、本連載は引き続き、私幼時報 5 月号で掲載されます。

子育ての支援ということについて

一般社団法人家族・保育デザイン研究所
東京大学名誉教授　汐見　稔幸

幼稚園教育要領に「子育ての支援」という言葉が使われたのは現在の要領からです。第三章の最後に次のように書かれています。

――2. 幼稚園の運営に当たっては，**子育ての支援**のために保護者や地域の人々に機能や施設を開放して，園内体制の整備や関係機関との連携及び協力に配慮しつつ，幼児期の教育に関する相談に応じたり，情報を提供したり，幼児と保護者との登園を受け入れたり，保護者同士の交流の機会を提供したりするなど，幼稚園と家庭が一体となって幼児と関わる取組を進め，地域における幼児期の教育のセンターとしての役割を果たすよう努めるものとする。その際，心理や保健の専門家，地域の子育て経験者等と連携・協働しながら取り組むよう配慮するものとする。――

書かれている支援の項目は①施設の開放②相談③情報提供④登園受け入れ⑤交流機会の提供などですが、最後に「地域における幼児期の教育のセンター」として役割を果たすこと、ということが付け加わっています。

保育所保育指針の場合もそうなのですが、ここには、子育てを支援するためにこうしたことをしてほしいという項目は簡単に書かれているのですが、そもそも子育ての支援とは何を指すのかという大事な定義は書かれていません。定義はなく、やるべき項目が羅列されていて、こうしたことを幼稚園ではぜひやってほしいというのです。

幼稚園で保護者の支援をしてほしいという趣旨のことが初めて書かれたのは 1998 年の要領の改定の際でしたが、そのときも明確な定義がなかったので、園ごとに取り組みがバラバラになったことがあ

人材育成・人材確保の悩みに解決のヒントをご提案します

園のリーダーのために
保育ナビ

予測困難な時代に対応した保育・園運営に役立つ、「国の動き」「人材育成」「園経営」「保育内容」「子どもの姿ベースの指導計画」「乳児保育」「小学校との接続」など必須の情報をお届けします。

B5判　80 ページ　定価 1,100 円（本体 1,000 円＋税 10%）

「子ども主体の保育」「小学校との接続」など、注目テーマも掲載！

誌面と連動した動画を毎月配信！

本社：〒113-8611 東京都文京区本駒込 6-14-9　https://www.froebel-kan.co.jp
ご注文・定期購読のお申し込みは 03-5395-6608 保育事業部営業本部まで

キンダーブックの フレーベル館

ります。中には、子育て支援でなく、親にしっかりしてもらわないと、ということで、親としての心得を教育するところも出てきました。少し上から目線で、しっかりと親をして下さい、と要望する内容です。保育所の方では、親が預かってほしいといえば理由を聞かずにともかく預かって、というようなことが言われたので、そんなに親を甘やかしてどうするのだ、という批判や反感がたくさんおこりました。親はみんな苦労して子育てするからこそしっかりした親になっていくのに、苦労する部分は保育所がなんとかします等としたらどうなるのですか、ということです。

こうした混乱は、厚労省が専門用語として使っている「子育て支援（育児支援）」は、教育の世界の用語ではなく、福祉の領域でいわれてきた専門的に扱われてきたソーシャルワークの用語のひとつということから来ています。保育指針には子育て支援を扱った章のはじめの「基本事項」として「ア 保護者に対する子育て支援を行う際には、各地域や家庭の実態等を踏まえるとともに、保護者の気持ちを受け止め、相互の信頼関係を基本に、保護者の自己決定を尊重すること。」と書かれています。ここに、ソーシャルワークの基本の一つであるクライエントの「自己決定」ということが強調されています。

これは長く相談援助という仕事をしてきたソーシャルワーカーたちが自らの経験から学んだことの大事な原則の表現です。例えばアメリカのバイスティックというソーシャルワーカーは60年代にその原則を７つにまとめて発表しましたが、今ではそれが「バイスティックの７原則」として「対人援助」を学ぶ人が必ず学ぶ内容になっています。

バイスティックは、援助する側は、批判的に聞かないで、ともかく「受容」して聞くこと、相手の言い分にいいとか悪いとかの価値判断を挟まないで聞くこと（「非審判的な態度」）、こちらはできるだけ感情を抑制して聞くこと、一人一人みな違うので、他人の例をあてはめないこと等を原則としているのですが、その中でも重視されているのがこの「自己決定の原則」なのです。これは、これからどうしていったらいいか、それを考えるのはあなたですよ、あなたが自分で考えて決めるのですよ、私はあなたが自分で決められるようにしっかり聞いたりうなずいたり励ましたりするだけですよ、ということです。

幼稚園で「子育ての支援」をするということは大事なことで、これからますます必要になると思いますが、「子育て支援」という営みの歴史は古く、そこで積み重ねられた原則、理念等が要領等で謳われていないために、現場で混乱が起こってきたのだと思います。関係者はバイスティックの７原則等に是非一度学んでほしいと思います。

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に準じた指導計画

月刊 保育とカリキュラム

毎月２日 発売

ひかりのくに株式会社
本社／〒543-0001 大阪市天王寺区上本町3-2-14 TEL.06-6768-1151代表
支社／〒175-0082 東京都板橋区高島平6-1-1 TEL.03-3979-3111代表

はじめてみませんか
寄付金募集

寄付金募集の際には日本私立学校振興・共済事業団の

受配者指定寄付金制度

をご活用ください

受配者指定寄付金制度を利用して、学校法人立の私立幼稚園へ寄付を行うと、寄付者（企業・法人）は法人税法上の優遇措置として**全額損金算入**することができます。

ご利用には一定の要件があります
まずは、下記までお気軽にご相談ください

日本私立学校振興・共済事業団
助成部　寄付金課
〒102-8145
東京都千代田区富士見 1-10-12
TEL　**03-3230-7316 ～7318**
e:mail　kifukin@shigaku.go.jp
HP-URL　https://www.shigaku.go.jp/

寄付金は私立学校の重要な収入源です！

※子ども子育て支援施設（学校法人が設置する幼保連携型認定こども園）支援のための寄付金もこちらの制度の対象となります

福井県からのおたより

福井の濃厚事情２０２２

〇共働き世帯が濃厚

福井県は、もともと共働き世帯が多い土地柄で、加盟園の大部分が新制度に移行しています。

さらに、こども園として園運営をしていく中で、年々、１号認定児がどんどん減ってきています。ほとんどの園において、２・３号児の割合の方が多くなり、毎年のように、園児募集の時期には「１号認定児がいない。」「３歳児もいない。」という言葉が漏れ聞こえます。少子化の影響もあり、各園、２・３号認定の受け入れ枠を増やし、人材不足の中、採用に苦労するという流れになっているのが実情です。教育の質の向上を担保しながら、保育教諭の労働環境を改善し、高まる長時間保育ニーズへの対応を充足させていくことの難しさを、改めて感じています。

〇コロナ対応が濃厚

福井県の感染予防対策は、これまでも充実しており、幸い、他県に比べて少ない割合を保っています。そのおかげで、(時期にもよりますが)比較的、コロナ禍以前に近い活動や行事も実施できています。一方で、新規感染者の人数だけでなく、居住する市町や年齢、場合によっては園名なども明らかになるため、園で感染者がでることへのプレッシャーが大きく、第６波においても、ますます緊張感が高まっています。

知り合いの知り合いは、自分の知り合い。という濃厚な人付き合いの土地柄で、園児や保護者、職員のプライバシーを守ることにも、心身を削りとられる、そんな状況です。

令和４年度も、加盟園が濃厚につながり合って、コロナにめげず、少子化や人材不足にめげず、協会としても、それぞれの園においても、より充実した活動ができるようにしたいと思います。

(福井県私立幼稚園・認定こども園協会副会長、福井市・藤島幼稚園／杉山聡理)

鹿児島県からのおたより

おかげ様で 70 周年を迎えました

一般社団法人鹿児島県私立幼稚園協会は、一昨年（令和２年）創立 70 周年を迎えました。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止に伴い記念事業等を一年延期し、令和３年度に実施いたしました。本来であれば、令和２年度第 59 回鹿児島県私立幼稚園教職員研修大会を創立 70 周年記念大会に位置づけ、記念式典や記念祝賀会を企画しておりました。これらすべてを令和３年度の県設置者園長研究協議会(9/28)と併せて企画準備いたしておりましたが、鹿児島県の「まん延防止等重点措置」適用を受けて、県設置者･園長研究協議会終了後の記念式典（内輪）のみを規模縮小で開催いたしました。大変恐縮ではありましたが、ご来賓の皆様方へのご案内やご臨席の自粛をいたした次第でございます。本紙面上での報告と併せて、ご理解を賜れれば幸いです。

改めて創立 70 周年、人間で言えば「古希」です。昭和 25 年に「協会発会式」が挙行されて以来 70 年が経過しました。改めて、歴史と伝統の重みを感じずにはおれません。諸先輩方に敬意と感謝の意を表するとともに、これまで培われてきた 70 年の歴史と伝統を再認識し、「信頼と未来の創造」を果たしていくべく、今後の幼児教育並びに鹿児島県私立幼稚園協会の充実・発展に更なる努力を重ね、未来社会に貢献できる人材育成団体としての自覚を持って、全加盟園で取り組んで参りたいと考えます。

結びに、全日本私立幼稚園連合会をはじめ関係各位の皆様方におかれましては、今後ともご高配を賜りますようお願い申し上げます。

((一社）鹿児島県私立幼稚園協会会長、肝属郡肝付町・おおぞらこども園／上原樹縁)

編集後記

思いがけず、夏季、冬季のオリンピック・パラリンピックが続けて開催されました。コロナ禍での開催の是非については統一することはできませんが、参加していたアスリートの活躍を見ると、その場に懸ける情熱やエネルギーは目を見張るものがあり、やはり沢山の「感動」を貰いました。きっと多くの子ども達の心にも今まで知らなかった世界が広がったことでしょう。

金メダル 15 個を含む通算 20 個のメダルを獲得し、6 度目のパラリンピックに出場した競泳選手・成田真由美氏の競技生活は、決して順風満帆ではなかったそうです。ある対談で彼女は「挑戦できることって生きている中で幸せなことですし、目の前にあるチャレンジできるものをチャレンジしないで終わるのは一生後悔すると思いました。」と話されていました。とても心に響く力強い言葉です。人生の始まりに立つ子ども達に、是非留めてほしい金言だと感じました。

（調査広報委員・塚本真紀）

（一財）全日私幼研究機構からのお知らせ

賛助会員（園児の保護者等）入会申込書について

（一財）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構の賛助会費の御礼として配布していた「PTA しんぶん」は、令和 4 年度より「こどもがまんなかしんぶん」として名称を新たに変更し発行をします。入会申込の時期になりましたので、ぜひこの機会に賛助会員としての皆様のご入会をお待ちしております。

【こどもがまんなかしんぶんについて】

■会　　費：1 口・年間 250 円

■入　会　特　典：年 11 回（8 月休刊、紙媒体 7 回、デジタル配信 4 回）

■入会申込書締切：令和 4 年 3 月 28 日（月）

詳しくは当機構の HP（https://youchien.com/publication/pta/）にも掲載されておりますのでご覧ください。

（一財）全日私幼研究機構・調査広報委員会 ☎ 03-6272-9232

(株)学研教育みらい 東京都品川区西五反田2－11－8 幼児教育事業部

お問い合わせは フリーダイヤル 0120-833-415

園ぴゅう太のメールサービス

らくらくメ～ル

園から保護者へらくらくメール送信！
組別・個別送信、既読確認もできます。
サーバー二重化で、いざという時も安心です。

スマホで らくらくバスメ～ル

スマートフォンでバスメールを送信！
大きなボタン表示で画面操作もらくらく。
タップするだけでメール送信できます。

ぜ～んぶ学研に おまかせ!!

らくらくホームページ

目的やご要望に合わせて作成し、学研が更新もお電話・FAXで対応します。
「お知らせ更新は園で…」というご要望にもシステム併用でご対応いたします。